
CAR LOVE LETTER 「Time machine」

YAS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C A R L O V E L E T T E R 「Time machine」

【Nコード】

N 8 4 4 0 H

【作者名】

Y A S

【あらすじ】

高校時代のクラスメイトから久しぶりの電話が掛かってくる。タイムカプセルを掘り起こそうぜ、という提案だった。（テーマ車種：三菱アウトランダー（CW5W））

（前書き）

車と人が織り成すストーリー。車は工業製品だけれども、ただの機械ではない。

貴方も、そんな感覚を持ったことはありませんか？

そんな感覚を「CAR LOVE LETTER」と呼び、短編で綴りたいと思います。

<Theme: MITSUBISHI OUTLANDER (CW
5W)>

高校の時の同級生から、久しぶりに電話がかかって来た。

高校卒業以来だから、15年ぶりに聞いた名前だった。

よく俺の電話番号がわかったな、と訪ねると、卒業アルバムの連絡先から実家に電話をして、母親に事情を説明してこの番号を教えてもらったらしい。

クラス委員長をしていたあいっらしいやり方だ。

しかしそこまでして一体何の用件だい？と聞くと、委員長は「覚えてるか？みんなで埋めたタイムカプセルの事。」と言って来た。

タイムカプセル？そんなの埋めたっけか？

「卒業記念の植樹に紛れて、こっそりみんなで埋めたじゃないか！」

あゝあ、思い出した！写真部のあいつの提案で、煎餅のブリキの箱にその時の大事な物を入れて、ハナミズキの根元に一緒に埋めたっけ。

またずいぶん経ってから思い出したもんだな、と聞くと、タイムカプセルに入れた予言の書の通りの事件が起こってしまうという流行りの映画を観て、自分達のタイムカプセルを思い出したって話だ。

「学校にも発掘の許可はとってあるんだ。夏休みの学生が居ない時

ならやつてもいいって。なあ、来週末にでもみんなで掘り起こしに行かないか?！」

また急な話だな。

興味はあるけど、今すぐには返事出来ないよ。仕事と家族の予定を確認して、また連絡するよ、とその場は話をまとめた。

「みんなから参加の連絡もらってるからさ。待ってるよ。」
委員長はもちろんお前も来るよな、と言う含みを持たせて、電話を切った。

妻に委員長からの話をする。

15年ぶりの、まあ言ってみれば同窓会みたいなもんだな。今まで一度もそんな機会もなかったし、久しぶりにみんなの顔も見たいんだよな、と半分お願いの様な説明に、少し不機嫌そうな顔をしながら「行つて来れば。」と案外あっさりと妻は応えた。

私の地元は、ここから車で3時間少々の所にある。

日帰り出来なくもないのだが、せっかくだから夜はタイムカプセルを肴に一杯やろうじゃないか、と言う風紀委員のあいつの提案で、私は実家に一泊することにした。

決行当日は熱中症が危ぶまれる程の最高の快晴だった。

私は前夜、変に神経がたかぶってしまい、あまり良く寝つけず、しかも予定よりずっと早く目覚めてしまった。

妻と子供に悪いねとことわり、私は一路地元まで、独りアウトランダーを走らせた。

オーディオのミュージックサーバーに入れてある、高校時代に聴いていたアルバムを信号待ちで急いで検索する。

妻には趣味じゃないと言われて普段はあまり聞けないのと、今回の話も相まって、一曲目のイントロを聞いた瞬間、あの頃の記憶が滝の様に頭のなかに流れ込んできた。

この車の売りのひとつ、ロックフォードのオーディオが、このライブ音源の雰囲気まで再生する。カーオーディオとは思えない、本当に素晴らしい鳴りなのだ。

きゅっと音を立てギターの弦の上をギタリストの指が滑り、ボーカリストのブレスが生々しく車内に響く。今運転席は、まさにライブハウスの最前列だ。

そうだ、このアーティストのライブに私も行った。あの当時付き合っていた、あの子と・・・。

いつもよりもオーディオの音を高めに合わせ、私はアウトランダーを高速に誘う。

少しヤバイ位のペースで、滑る様にアウトランダーは走る。私の気持ちは、もう高校時代のあの頃にタイムスリップしている様だ。

大好きだったアーティストのアルバムを、三枚続けて聴破する。もうそこには地元で程近いインターが見えて来ている。

あつと言う間だ。今日のアウトランダーはまるでタイムマシンの様だ。

委員長に指定された時間からはまだ余裕はある。

私は一度実家へ顔を出そうかと思ったが、せっくなのでアウトランダーで地元の街をぐるりと回る事にした。

学生の行動力では何時間も掛った道のりも、車で走るとものの数十分で回れてしまう。

こんなに短い距離だったのか。私は思いもよらぬ所で、時間の儚さを感じさせられた。

まだ少し時間に余裕があったので、私は高校時代に行き着けだったレコード店に行く事にした。

車を停めて店の入り口をくぐった瞬間、私は自分の感覚を疑った。あの頃と全く変わらないこの雰囲気。薄暗い店内に、画家の様な店の主人が音楽雑誌を読みながら、店内に流れるジャズに体を揺すっている。

懐かしい。思わず私は息を飲んだ。

ふらりと向かった先は、私が高校生の頃に一番好きだった、さつきアウトランダーで聴いていたアーティストのコーナー。

手にとったのは、そう、あの子と一緒に行ったライブのテーマアルバムだ。

あの時は、自分と彼女のライブチケットをかうだけでいっぱいだったもんな。このアルバム、欲しかったんだ。

私はそのアルバムをかう事にし、あの頃歩き慣れたレジまでの通路を記憶と共に辿り、主人にアルバムを手渡す。

主人はアルバムと一緒にCDケースとフリーペーパーを袋に入れてくれる。

そうそう、おまけを入れてくれるんだ。あの頃からのサービスだ。変わってない。当時は確か、カセットテープ二本だったよな。

「私ね、学生の頃ここによく通っていたんですよ。」私は思わず主人に話しかける。

「そうでしたか。おかえりなさい。」柔らかな笑顔で主人はそういう。しわだらけの白髪頭になってしまっているが、本当に懐かしい笑顔だ。

感慨にふけっていると、後ろから私の名を呼ぶ声がした。

不意を突かれて振り返った先には、女性が居た。

「・・・君か？」それは、高校の頃に付き合っていた彼女だった。そうだ、このアルバムのライブに一緒に行った、その彼女だ。

彼女は歳相応の落ち着きはあるが、容姿や雰囲気はあの頃のままだった。

彼女は少し恥ずかしそうに、でも満面の笑みで「久しぶり！元気だった？あんまり変わらないね。」と私に歩み寄り、嬉しそうにそう言った。

「君も委員長に呼び出されたのか。いやあ、驚いたよ。君も変わらないな。」

照れ笑いを何とかごまかし、私は彼女を助手席に乗せて学校へ向かった。気恥ずかしいので、オーディオは地元FM局に切り替えて。

あのレコード店は、私と彼女の待ち合わせ場所にもなっていた。学校帰りはわざわざ別行動して、あのレコード店で落ち合って、そこから二人で歩いて帰るのだ。

誰かに見られるのが恥ずかしくて、でも早く彼女と会いたくて、友達と別れた後は、ダッシュでレコード店までの道を急いだんだ。だからだろうか？さっき彼女があのレコード店に訪れたのは。あの頃の思い出を、彼女も思い出していたのだろうか。

「もう着いちゃうんだね。やっぱり車だと早いね。」

彼女は外を眺めてそう言った。

私も彼女も、高校を卒業してからは地元を離れ、違う街の大学へ進学した。だから私も彼女も、この街を車で走った経験は少ないのだ。

私は西の方へ、彼女は北の方へ進学した。それは遠距離恋愛のスタートだった。

始めのうちは毎日電話したりポケベルを持ったり、連絡を取り合っていたのだが、次第にそれも少なくなって行ってしまった。

私達は、いわゆる自然消滅の様に、関係をどちらからともなく閉ざしてしまった。

そんなだから、15年経った今でも、彼女との縁はまだ残っている様な、そんな感覚を覚えた。

学校のグラウンドには、もうみんな集まっている様だった。

集合時間まではまだ少しあるって言うのに、みんな気がはい。

ずいぶん太ってしまったヤツもいれば、ガリガリに痩せてしまったヤツもいて、白髪混じりのヤツもいれば、ずいぶん額が後退してしまったヤツもいる。

可愛かったクラスのマドンナも、少しふくよかなお母さんの様相だし、大人しくて真面目だったあの子は、歳不相応な程派手な格好をしていたり。

そんな中、私と彼女は「変わらないねえ。」とみんなから驚かれた。

私達は再会を懐かしみながらもタイムカプセルが気になって仕方なかった。委員長の導きで、私達は一本の木に集まる。

「さあ、ここに俺達の青春が眠ってるぞ。やるか!」

用務員室と書かれたスコップを振りかざし、委員長はハナミズキの

根元を掘り始める。

ものの数分で委員長は音を上げる。次はラグビー部のアイツがスコップをもつ。相変わらざるのガタイに期待は否応なしに高まる。女子も無責任な応援を始める。しかし、まだ出てこない。

結局男総出で汗だくになって掘り進め、信じられない位の深さの所で、私は石や根ではない、固い感触を探り当てた。

「あつた。あつたぞー！」私は思わず声を裏返して叫んだ。するとみんなから歓声が上がる。

土の中からはうっすらと錆びたブリキの箱が出てきた。中身は大丈夫だろうか？

委員長は嚴重にテープで封印された蓋を開ける。すると中身はさらにビニール袋で嚴重に封印されていた。3重のビニール袋の封印をはやる気持ちを抑えて開く。この封印の念の入れようは絶対委員長がやったんだと、その場の意見は満場一致した。

ついに15年の封印が解かれる。みんなの目の輝きは、まさに高校の頃そのものだった。

封印の中には、みんなの思い思いの物が入っていた。

キーホルダーやら写真やら、文庫本やマグカップ、使いかけの消ゴムや、お金なんか入れているヤツもいた。

私はあのアーティストのCDを入れた様だ。無い無いと思っていたのだが、ここにあったのか。そりゃあ見付からない訳だ。

私は彼女の宝物が気になった。

「何、入れてたの？」と聞くと、彼女はふふつと笑って「ナイシヨ。」と答えた。

その仕草はあの頃と全く変わっていない。私は胸の奥がキュツと狭くなる感じがした。

タイムカプセルの発掘の後、職員室に挨拶に行き、当時の担任とも再会した。

大学出立ての新米教師が、今じゃ学年主任だつてさ。

その晩の宴には先生も合流して、久しぶりに羽目を外した。

風体こそ変わってしまったが、乗りは高校の頃そのものだ。地元の訛りで馬鹿騒ぎして大笑いして、気付けば終電がなくなってしまう始末。

私は数人でふらふらと歩いて帰る事にした。

夜風を感じながら、委員長とラグビー部が先陣を切って歩く。

私は風紀委員と話ながら歩いていたが、一番後ろで独り星を眺めながら歩く彼女が気になって仕方なかった。

私は折りを見て彼女に近寄った。そして彼女に「よかったら、明日会わないか。」と胸を高鳴らせて耳打ちした。

せつかく再会出来たのだから、私は彼女との関係に、きちんと区切りを付けておきたかった。

もちろんこの指輪に誓って一線を越えるつもりは毛頭なかったが、正直少しだけ淡い期待はしていただろう。何故なら、今でも私の心の奥には、彼女が棲んでいたからだ。

だからこそ、この胸の高鳴りだ。

そんな私に、しばらく間を置いてから彼女は「・・・いいよ。」と

軽く頷き、短く答えた。

翌日、私達はあのレコード店で待ち合わせた。

私はまた、はやる気持ちを抑えて、アウトランダーを走らせる。

店はまだ閉まっていた。彼女は店の前で、携帯の画面を眺めて私を待っていた。

「お待たせ。」あの頃のように私は彼女に声をかける。

「遅いぞ！」と彼女もあの頃のように返す。

まさに私達は、あの頃にタイムスリップしている様だった。

私達は高校の頃の思い出の風景を、まるで早送りの様に車窓から眺める。

あそこもよく行ったね、ああ、あんな所もあったつけ。セピア色の思い出が、次々とフルカラーで蘇る。

街を一通りぐるりと回った後、私達は高台の公園にたどり着いた。街を見渡せるこの公園。あの頃は、レコード店から歩いて、ここで数時間話をしてから、いつも名残惜しく門限にあわせて家路を急いだんだ。

私達は公園のベンチに腰掛け、街を見下ろした。

そう、このベンチで夕日を眺めながら、私達は初めてキスをしたんだ。彼女は覚えているだろうか。

私は、彼女の近況を聞いたり、自分の仕事や家族の話なんかをしようと思った。だが、彼女の横顔を見ると、何故か会話を切り出せなくなってしまった。

しばらくの沈黙の後、「ここだったね。私達の指定席。」と彼女が遠くを見つめて口を開いた。

「ああ、ここでいろんな話、したよな。」私がそう返すと彼女は「キスも、したね。」と私の顔を見つめてきた。

私は口から心臓が飛び出しそうな感じがした。まさか彼女は、それを望んでいるのだろうか？

私は彼女の右の頬にそつと左手を沿えた。彼女はその私の左手に軽く手を沿え、私の指輪をさすつて、少し微笑んで目を伏せた。

「私ね、離婚したんだ。」と彼女はポツリと呟いた。そしてもう一度私の指輪をさすつて「少しだけ、あの頃に戻ってみる？」と言ってきた。とても寂しそうな目をして。

私はたまらない気持ちになった。私は彼女とうやむやに別れ、その後何人かの女性と付き合い、そして結婚して子供も授かった。

でも彼女は離婚して傷ついて、そして今私の前に居る。彼女の人生の歯車を狂わせたのは、自分なのではないかと感じたのだ。

「ごめん……。」私は彼女の肩をそつと抱き寄せた。

「なんで、謝るの……？」少し潤んだ声で、彼女は私の肩にもたれた。

言葉もそれ以上の触れ合いも要らなかった。ただそうしているだけで、私達には十分だった。

車に戻って、私はあのアーティストのCDをかけた。タイムカプセルに入っていた物だ。

それを聴いて、彼女はバッグから一枚の紙を取り出した。

なんとそれは、私達が行ったあのライブのチケットの半券だった。
「これが、私のタイムカプセルよ。」と彼女はまたあの頃の表情で笑って見せた。

彼女を家まで送って行く。この家の外壁も本当によく見た。懐かしい。

別れ際に彼女は、今日私に会えてよかったと言ってきた。

「実は私、また人生をやり直そうとしてるの。新しいパートナーとね。」と、今度は私の知らない表情で笑って見せた。

「そうか、それはよかった。俺も君に会えてよかったよ。」そういう私の表情は、彼女にはどう映ったのだろうか。

私が角を曲がるまで、彼女はずっと私に手を振っていた。

私は彼女の視界から消える直前、あのアーティストが歌っていたように、ブレーキランプを点滅させた。

でもそれは5回ではなく、4回。彼女は、気付いてくれただろうか。

太陽が西に傾きかけた頃、私はタイムマシンを現代に向かって走らせる。

この二日間は、まるで夢の様な感覚だった。

しかしこれが夢ではないことを、カーオーディオから流れるあのアーティストの切ないバラードと、アウトランダーにうつすらと残る彼女の香りが証明しているのだ。

トンネルを抜けると、見慣れた私の住む街が、夕日に真っ赤に染まっていた。

彼女と初めてキスをした、あの時の様に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8440h/>

CAR LOVE LETTER 「Time machine」

2010年12月26日14時31分発行